



弾除神社

# まだ戦後は終わらない 出征兵士の写真 早くお返ししたい

【山口】「弾除(たまひよ)くなり、平成の新時代に入  
け写真を返さしします」  
—佐伯郡深田町の三坂神社  
(佐伯池田宮司)が平成元  
年七月からこんな集書を全  
国へ出した。今年は大東亜  
戦争が終って四十六年目、  
戦争の面影を残すもの、戦  
争を知る人がだんだん少な  
い。同神社は、「弾除神社」

日露戦争と西氏が折願  
して出征したところ全員が  
無事に帰還したことにゆら  
いする。このことが全国的  
に知れわたる、大東亜戦争  
中には、息子や夫が無事に  
帰って来ほしいとの願ひ  
から、身内や両親が本人の  
代わり写真を持って野尻

防犯隊等見取から社頭ま  
での二、三の道を延々人海が  
続いたと、また一日最高  
新報数が八百八十二まで達  
したこともあるといふ。  
戦後、占領軍を恐れて  
参拝者の名簿は焼却処分し  
たが、写真は一生懸命返  
ってきてほしいとの祈りが込  
められてをり、勝手に処分  
できない」と隣家の床下に  
隠した。

佐伯宮司は昭和五十四  
年、五十歳になったのを機  
会に写真の整理をはじめ  
た。戦後からお礼参りに来  
た人々に返知されてはみた  
が、一万三百六十九枚が残  
存。県内をはじめ沖縄と福  
木県を除く全国、そして中  
国、朝鮮、台湾などからの  
ものも。

マスコミなどを通じての  
呼びかけで本人や戦死した  
人の遺族などへ返知した写  
真は二千五百四十九枚。と  
ころが平成元年六月にまっ  
たく問い合わせがなくなっ  
た。数多くの手がかりがあ  
りながら返知されない写真  
がのこった。

「戦災で焼かれ、奉納写  
真が唯一残されたものかも  
しれない。何とかしなければ……」と、小学校の教諭  
を定年退職した平成元年の  
七月から「集書作戦」を始  
めた。整理した名簿と電話  
帳をつき合せ、往復葉書  
を投函。出征した本人では  
なく家族らの手によって奉  
納され、その両親や身内が  
なくなつてある人がほとん  
どで、出征した本人が知ら  
ず、集書を多く集く人が多  
いといふ。集書作戦で今年  
の七月初旬までに返知され  
た写真は、九百十二枚。こ  
の取材で残存数を調べても  
らつてある間にも数枚の写  
真が引き取られていった。  
自分の苦学道の姿を思ひ起  
こす人、戦死した父親の姿  
を確信する人、写真を手に  
した人はそれぞれの思ひに  
感服するといふ。

まだ約一万六千八百枚の  
写真が佐伯宮司のもとに残  
る。佐伯宮司は「写真の束  
物を見ると一枚一枚に表情  
があり、早く何とかしてく  
れと語りかけてをられる  
やうで……その通り早くお  
返ししたい一念から来て  
いるのです」と話す。  
問い合わせは、佐伯宮司宅  
☎〇八三五五一一〇六八  
八へ。



たくさんの写真集を手にする佐伯宮司

# 思い出、お返しします

## 出征兵士の 奉納写真

山口県三坂神社宮司  
佐伯 治典さん



「写真を返すまで戦後が終わらない」とおぼろげに語る佐伯宮司

### 私の戦後まだ終わらない

## 45年、こつこつ 2500枚

四十九年前の今日、太平洋戦争が始まった。この戦争で武運長久を祈って奉納された写真の返還を続けている神社がある。山口県佐伯郡三坂神社の宮司、佐伯治典さん(六二)は「戦争が終わって五十年近くになるが、あの時、写真を奉納して肉親の安全を祈る家族の思いがどんなもったか想像すると、どうしても返しておきたい」と、少なからずこつこつと奉納の写真を返すことに続けている。

第二次世界大戦前、三坂神社は、武運長久の神社。また「弾除(たまよじ)神社」で知られていた。出征した夫や息子の無事を祈って数多くの出征者の写真が奉納された。

「戦時、三坂神社に武運長久のため奉納された写真が、約〇〇〇〇枚の別写真を、ぜひお返ししたい」と思っています。(中略) 武運を祈って奉納された肉親の真心と情愛のこもった誠な写真なものであります。いろいろな思い出がじんじんとまいりてきてあります。全部お返しして、はじめ

私の戦後は終わる思いではありません。写真奉納した人に出しているのはがきの文面だが、この短い文章の中に佐伯さんの気持ちが、すべて込められている。このはがきのあて先は、N.T.T.の電話帳で調べ、昨年の七月から新たに始めた方法だ。

三坂神社は、平安時代初期の「延喜式」にも記載がある由緒ある神社だが、戦前は「弾除神社」として多くの参拝者があった。多い時は境内から参道を越えて、近くの駅まで二、三もの人並みが続く。一日八百八十人の参拝者を記録したこともあるという。

その時奉納された写真が一万九千あり。大半は軍服姿だが、結婚式の記念写真の半分を切ったものや親友母らしき人と写った木の幼児時代の写真などもある。当時はまだ写真は貴重

品で、大事にしていたであろうと予想される写真は、終戦の時、占領軍の目から逃げるため、参拝者多層と二階に焼却することを考えたが、「夫や息子の無事を祈った女性の気持ちを思う」と懐いてしまうのはしのびない」と考えた前宮司の夫人の花代さん(昭和五十五年死去)の考えで、長持ちに入れて隣家に預け、焼却を免れた。

写真の返還は終戦後から郵送で始めたが、今の宮司の佐伯さんの代になり、昭和三十三年から記録に取り始めた。奉納者は山口、島根県の人が多いが、北は北海道から、南は鹿児島県まで、また一部は旧朝鮮、台湾、旧満州のものもあり、返還は思うとこに返すなかつた。

昭和五十四年から名簿づくりを始め、N.H.K.などマスコミの協力で全国から問い合わせがあり、一年に八百八十九枚返還された時もある。しかし平成元年の時、返還数は一千五百四十九で、残りは一万六千八百八。戦後四十五年かけて、まだ一五五返したにすぎない。いま取り入れているのは、伯さんの最後の平段。同姓同名の人も多く間違っているが、現在生きている人が対象なので六、七割は本人に届くという。